

演習問題 目次

- **【一】2021 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(3)
- 《出典》「落窪物語」・平安前期・作り物語
- **【二】2020 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(6)
- 《出典》「春日権現験記」・中世(鎌倉後期)・絵巻物
- **【三】2019 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(9)
- 《出典》「嵐雪が妻、猫を愛する説」・關更編『誹諧世説』・近世中期・俳文
- **【四】2018 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(12)
- 《出典》「太平記」・中世(室町前期)・軍記物語
- **【五】2017 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(15)
- 《出典》「源氏物語」真木柱卷」・平安中期・作り物語
- **【六】2016 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)** (課題: 月 日まで) [済: 月 日]……………(18)
- 《出典》「あさぎり」・中世(鎌倉?)・擬古物語

- **【七】2015 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)**〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……………(21)
- 《出典》「夜の寢覚」・平安後期・作り物語
- **【八】2014 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理一) 教養(理二) 教養(理三)**〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……………(24)
- 《出典》井原西鶴「世間胸算用」・近世前期・浮世草子
- **【九】2013 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理一) 教養(理二) 教養(理三)**〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……………(27)
- 《出典》「吾妻鏡」・中世(鎌倉後期)・歴史書
- **【十】2012 東京大学 2/25, 前期日程 教養**〔課題： 月 日まで〕〔済： 月 日〕……………(30)
- 《出典》「俊頼髓脳」・平安後期・歌論書
- 解答……………(33)

【1】2021 東京大学 2/25 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、継母にいじめられて育ったが、ひそかに道頼と結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくて、「今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「アさうさうしきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々の装束ども賜びて、「よろしうせよ」とのたまひて、いそぎて、その日になりて、一条の大路の打杭打たせ給へれば、「今は」と言へども、誰ばかりかは取らむと思して、のどかに出で給ふ。

御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、下仕四人乗りたり。男君具し給へれば、御前、四位五位、いと多かり。弟の侍従なりしは今少将、童におはせしは兵衛佐、ウ「もろともに見む」と聞こえ給ひければ、皆おはしたりける車どもさへ添はりたれば、二十あまり引き続き、皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、わが杭したる所の向かひに、古めかしき檳榔毛一つ、網代一つ立り。

御車立つるに、「男車の交じらひも、疎き人にはあらで、親しう立て合はせて、見渡しの北南に立てよ」とのたまへば、「この向かひなる車、少し引き遣らせよ。御車立てさせむ」と言ふに、しふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引き遣らせよ」とのたまはすれば、雑色ども寄りて車に手をかくれば、車の人出で来て、「など、また真人たのかうする。いたう逸る雑色かな。豪家だつるわが殿も、中納言におはしますや。エ「一条の大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「西東、齋院もおぢて、避き道しておはすべかなるは」と、口悪しき男また言へば、「同じものと、殿を一つ口にな言ひそ」などいさかひて、えとみに引き遣らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、御前の人、左衛門の藏人を召して、「かれ、行ひて、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、ただ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引きとどめず。御前、三四人ありけれど、「益なし。この度、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、オこの殿の牛飼ひに手触れ

「てむぎ」と言ひて、人の家の門かどに入りて立てり。目をはつかに見出して見る。

少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実じつの御心は、いとつかしう、のどかになむおはしける。

〔注〕

○賀茂の祭——陰曆四月に行われる賀茂神社の祭。齋院ごけいの御禊ごけいがある。葵あおい祭。

○打杭——打ち込んで立てる杭。ここでは、車を停める場所を確保するための杭。

○御前——車列の先払いをする供の人。

○侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐——それぞれ昇進したということ。

○次第しだいどもに——身分の順に整然と。

○檳榔毛びんろうげ一つ、網代あみしろ一つ——いずれも牛車の種類。「檳榔毛」は上流貴族の常用、「網代」は上流貴族の略式用。

○見渡しみわたしの北南に——互いに見えるように、一条大路の北側と南側に。

○雑色ざしき——雑役をする従者。

○真人まことたち——あなたたち。

○豪家ごうけだつるわが殿——権門らしく振舞う、あなたたちのご主人。

○強法ごうぼう——横暴なこと。

○左衛門ざゑもんの蔵人——落窪おちくぼの君の侍女阿漕あこぎの夫、帯刀たちはき。道頼みちよりと落窪おちくぼの君の結婚に尽力した。

○人の家の門に入りて——牛車から離れて、よその家の門に入って。

設問

(二) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「一条の大路も皆領じ給ふべきか」(傍線部オ)とはどういうことか、主語を補って現代語訳せよ。

(三) 「この殿の牛飼ひに手触れてむや」(傍線部オ)とは誰をどのように評価したものか、説明せよ。

【1】2020 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

次の文章は、春日明神の靈験に関する話を集めた『春日権現験記』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

興福寺の壹和僧都は、修学相兼ねて、才智たぐひなかりき。後には世を^{のが}通れて、外山といふ山里に住みわたりけり。そのかみ、維摩の講師を望み申しけるに、思ひの外に祥延といふ人に越されにけり。なに^{ごと}も前世の宿業にこそ、とは^ア思ひのどむれども、その恨みしのびがたくおぼえければ、ながく本寺論談の交はりを辞して、斗敷修行の身とならんと思ひて、弟子どもにもかくとも知らせず、本尊・持経ばかり竹の笈に入れて、ひそかに三面の僧坊をいでて四所の靈社にまうでて、泣く泣く今は限りの法施を奉りけん心の中、ただ思ひやるべし。さすがに住みこし寺も離れまうく、馴れぬる友も捨てがたけれども、思ひたちぬることなれば、行く先いづく^{とだに}定めず、なにとなくあづまのかたに赴くほどに、尾張の鳴海潟に着きぬ。

潮干のひまをうかがひて、熱田の社に参りて、しばしば法施をたむくるほどに、いけしかる巫女来て、壹和をさして言ふやう、「汝、恨みを含むことありて本寺を離れてまどへり。ウ人の習ひ、恨みには堪へぬものなれば、ことわりなれども、心になはぬはこの世の友なり。陸奥国えびすが城へと思ふとも、エそれもまたつらき人あらば、さていづちが赴かん。いそぎ本寺に帰りて、日ごろの望みを遂ぐべし」と仰せらるれば、壹和頭を垂れて、「思ひもよらぬ仰せかな。かかる乞食修行者になにの恨みか侍るべき。あるべくもなきことなり、いかにかくは」と申すとき、巫女大いにあざけりて、

つつめども隠れぬものは夏虫の身より余れる思ひなりけり

といふ歌占をいだして、「汝、心幼くも我を疑ひ思ふかは。いざさらば言ひて聞かせん。汝、維摩の講師を祥延に越えられて恨みをなすにあらずや。かの講師と言ふはよな、帝釈宮の金札に記するなり。そのついで、すなはち祥延・壹和・喜操・観理とあるなり。帝釈の札に記するも、これ昔のしるべなるべし。我がしわざにあらず。とくとく愁へを休めて本寺に帰るべきなり。和光同塵は結縁の始め、八相成道は利物の終りなれば、神といひ仏といふその名は変はれども、同じく衆生を哀れぶこと、悲母の愛子のごとし。汝は情けなくも我を捨てずといへども、我は汝を捨てずして、かくしも慕ひ示すなり。春日山の老骨、既に疲れぬ」とて、上がらせ給ひにければ、壹和、かたじけなき、たふとき、ひとかたならず、渴仰の涙を抑へていそぎ帰り上りぬ。その後、次の年の講師を遂げて、四人の次第、オあたかも神託に違は

[注]

- 興福寺——奈良にある藤原氏の氏寺。隣接する藤原氏の氏社で春日明神を祭神とする春日大社とは関係が深い。
- 維摩の講師——興福寺の重要な法会である維摩会で、講義を行う高僧。
- 祥延——僧の名。
- 三面の僧坊——興福寺の講堂の東・西・北を囲んで建つ、僧侶達の住居。
- 四所の霊社——春日大社の社殿。四所の明神を、連なった四つの社殿にまつる。
- 鳴海瀉——今の名古屋市にあった干潟。東海道の鳴海と、熱田神宮のある熱田の間の通り道になっていた。
- 夏虫——ここでは螢のこと。
- 歌占——歌によって示された託宣。
- 帝釈宮——仏法の守護神である帝釈天の住む宮殿。
- 喜操・観理——ともに僧の名。
- 和光同塵——仏が、衆生を救うために仮の姿となって俗世に現れること。
- 八相成道——釈迦が、衆生を救うためにその一生に起こした八つの大事。
- 利物——衆生に恵みを与えること。

設問

- (一) 傍線部イ・ウ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「思ひのどむれども」(傍線部)とあるが、何をどのようにしたのか、説明せよ。

(三) 「あたかも神託に違はざりけりとなん」(傍線部オ)とあるが、神託の内容を簡潔に説明せよ。

【三】2019 東京大学 2/25. 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

次の文章は、蘭更編『誹諧世説』の「嵐雪が妻、猫を愛する説」である。これを読んで、後の設問に答えよ。

嵐雪が妻、唐猫のかたちよきを愛して、美しきふとんをしかせ、食ひ物も常ならぬ器に入れて、朝夕ひざもとをはなさざりけるに、門人・友どちなどにもアうるさく思ふ人もあらんと、嵐雪、折々は、「獸を愛するにも、イ程あるべき事なり。人にもまさりたる敷き物・器、食ひ物とても、忌むべき日にも、猫には生ざかなを食はするなど、よからぬ事」とつぶやきけれども、妻しのびてもこれを改めざりけり。

さてある日、妻の里へ行きけるに、留守の内、外へ出でざるやうに、かの猫をつなぎて、例のふとんの上に寝させて、さかななど多く食はせて、くれぐれ綱ゆるさざるやうに頼みおきて出で行きぬ。嵐雪、かの猫をいづくへなりとも遣はし、妻をたばかりて猫を飼ふ事をやめんと思ひ、かねて約しおける所ありければ、遠き道を隔て、人して遣はしける。妻、日暮れて帰り、まづ猫を尋ぬるに見えず。「猫はいつくへ行き侍る」と尋ねければ、「されば、そのあとを追ひけるにや、しきりに鳴き、綱を切るばかりに騒ぎ、毛も抜け、首もしまるほどなりけるゆゑ、あまり苦しからんと思ひ、綱をゆるしてさかななどあてけれども、食ひ物も食はで、ただうろろと尋ぬるけしきにて、門口・背戸口・二階など行きつ戻りつしけるが、それより外へ出で侍るにや、近隣を尋ぬれども今に見えず」と言ふ。妻、泣き叫びて、ウ行くまじき方までも尋ねけれども、帰らずして、三日、四日過ぎければ、妻、袂をしぼりながら、

猫の妻いかなる君のうばひ行く 妻

かく言ひて、こちあしくなり侍りければ、妻の友とする隣家の内室、これも猫を好きけるが、嵐雪がはかりて他所へ遣はしける事を聞き出だし、ひそかに妻に告げ、「無事にて居侍るなり。必ず心を痛め給ふ事なかれ。我が知らせしとなく、何町、何方へ取り返しに遣はし給へ」と語りければ、妻、「かかる事のあるべきや。我が夫、猫を愛する事を憎み申されけるが、エさては我をはかりてのわざなるか」と、さまざま恨みいどみ合ひける。嵐雪もオあらはれたる上は是非なく、「実に汝をはかりて遣はしたるなり。常々言ふごとく、余り他に異なる愛し様なり。はなはだ悪しき事なり。重ねて我が言ふごとくなさずば、取り返すまじ」と、さまざま争ひけるに、隣家・門人などいろいろ言ひて、妻にわびさせて、嵐雪が心をやはらげ、猫も取り返し、何事なくなりけるに、

睦月むつきはじめの夫婦めをといさかひを人々に笑はれて

喜ぶを見よや初ねの玉たまばは木き 嵐雪

〔注〕

○嵐雪——俳人。芭蕉の門人。

○門口・背戸口——家の表側の出入り口と裏側の出入り口。

○内室——奥様。

○唐猫——猫。もともと中国から渡来したためこう言う。

○玉ばは木——正月の初子はつねの日に、蚕かいこ部屋を掃くために使う、玉のついた小さな箒ほうき。

設問

(一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。

(二) 「行くまじき方までも尋ねけれども」(傍線部ウ)を、誰が何をどうしたのかわかるように、言葉を補い現代語訳せよ。

(三) 「さては我をはかりてのわざなるか」(傍線部エ)とあるが、嵐雪は妻をどうだましたのか、説明せよ。



【四】2018 東京大学 2/25. 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

次の文章は『太平記』の一節である。美しい女房の評判を聞いた武蔵守高師直は、侍従の局に仲立ちを依頼したが、すでに人妻となつてゐる女房は困惑するばかりであつた。これを読んで、後の設問に答えよ。

侍従帰りて、「かくこそ」と語りければ、武蔵守いと心を空に成して、「たび重ならば情けに弱ることもこそあれ、文をやりてみばや」とて、兼好と言ひける能書の通世者をよび寄せて、紅葉襲の薄様の、取る手も燻ゆるばかりに焦がれたるに、言葉を尽くしてぞ聞こえける。返事遅しと待つところに、使ひ帰り来て、「御文をば手に取りながら、あけてだに見たまはず、庭に捨てられたるを、人目にかけてと、懐に入れ帰りまゐつて候ひぬる」と語りければ、師直大きに気を損じて、「いやいや物の用に立たぬものは手書きなりけり。今日よりその兼好法師、これへ寄すべからず」とぞ怒りける。

かかるところに薬師寺次郎左衛門公義、所用の事有りて、ふとさし出でたり。師直かたはらへ招いて、「ここに、文をやれども取つても見ず、けしからぬ程に気色つれなき女房のありけるをば、いかがすべき」とうち笑ひければ、公義「人皆岩木ならねば、いかなる女房も、慕ふに靡かぬ者や候ふべき。今一度御文を遣はされて御覧候へ」とて、師直に代はつて文を書きけるが、いかなる言葉はなくて、

返すさへ手や触れけんと思ふにぞわが文ながらうちも置かれず

押し返して、仲立ちこの文を持ちて行きたるに、女房いかが思ひけん、歌を見て顔うちあかめ、袖に入れて立ちけるを、仲立ちさてはたよりあしからずと、袖をひかへて、「さて御返事はいかに」と申しければ、「重きが上の小夜衣」とばかり言ひ捨てて、内へ紛れ入りぬ。暫くあれば、使ひ急ぎ帰つて、「かくこそ候ひつれ」と語るに、師直うれしげにうち案じて、やがて薬師寺をよび寄せ、「この女房の返事に、『重きが上の小夜衣』と言ひ捨てて立たれけると仲立ちの申すは、衣・小袖をととのへて送れとにや。その事ならば、いかなる装束なりとも仕立てんずるに、いと安かるべし。これは何と言ふ心ぞ」と問はれければ、公義「いやこれはわざやうの心にては候はず、新古今の十戒の歌に、

さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ

と言ふ歌の心を以つて、オ人目ばかりをはばか憚り候ふものぞとこそ覚えて候へ」と歌の心を釈しければ、師直大きに悦よろこんで、「ああ御ご辺はへん弓箭ゆみやの道のみならず、歌道にさへ無双の達人なりけり。いで引出物せん」とて、こがねづく金作りの丸鞆まるたぎやの太刀たち一振り、手づから取り出だして薬師寺にこそ引かれけれ。兼好が不祥、公義が高運、栄枯一時に地をかへたり。

〔注〕

○兼好——兼好法師。『徒然草』の作者。

○紅葉襲の薄様——表は紅、裏は青の薄手の紙。

○薬師寺次郎左衛門公義——師直の家来で歌人。

○仲立ち——仲介役の侍従。

○十戒の歌——僧が守るべき十種の戒律について詠んだ歌。

○丸鞆——丸く削った鞆。

○小夜衣——着物の形をした寝具。普通の着物よりも大きく重い。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「さやうの心」(傍線部エ)とは、何を指しているか、説明せよ。

(三) 「人目ばかりを憚り候ふものぞ」(傍線部オ)とあるが、公義は女房の言葉をどう解釈しているか、説明せよ。



次の文章は、『源氏物語』真木柱巻の一節である。玉鬘たまかずらは、光源氏(大殿)のかつての愛人であった亡き夕顔と内大臣との娘だが、両親と別れて筑紫国で育った。玉鬘は、光源氏の娘として引き取られ多くの貴公子達の求婚を受けるかたわら、光源氏にも思慕の情を寄せられ困惑する。しかし意外にも、求婚者の中でも無粋な鬘ひげくろ黒大将の妻となつて、その邸に引き取られてしまった。以下は、光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわざなりや、いとかう際々きはきはしうとしも思はでたゆめられたる妬ねたさを、人わろく、すべて御心にかからぬをりなく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世すくせいなどいふものアおろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと起き臥ふし面影にぞ見えたまふ。大将の、をかしやかにわららかなる気けもなき人に添そひあたらむに、はかなき戯たはぶれ言もつつましうあいなく思されて、念じたまふを、雨いたう降りていとどやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣はすも、かつは思はむことを思すに、何ごともえつづけたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしのぶや
つれづれに添へても、恨めしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでかは聞きこゆべからむ」などあり。

隙ひまに忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にもほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などはえのたまはぬ親にて、げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御気色けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思しつづくれど、右近はほの気色見けり。ウういかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、「聞きこゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

「ながめする軒のきのしづくに袖ぬれてうたかたエえ人をしのばざらめや
ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ」とぬやみやしく書きなしたまへり。

ひきひろげて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、人も見ばうたてあるべしとつれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍かむの君を朱雀院すさくゑんの後の切せちにとり籠めたまひしをりなど思し出づれど、さし当たりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴か掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音つまね思ひ出でられたまふ。

〔注〕

○つれなきわざ——鬚黒が玉鬘を、光源氏に無断で自分の邸に引き取ったこと。

○紛らはし所——光源氏が立ち寄っていた玉鬘の居所。

○右近——亡き夕顔の女房。玉鬘を光源氏の邸に連れてきた。

○隙に忍びて——鬚黒が不在の折にこっそりと。

○うたかた——泡がはかなく消えるような少しの間も。

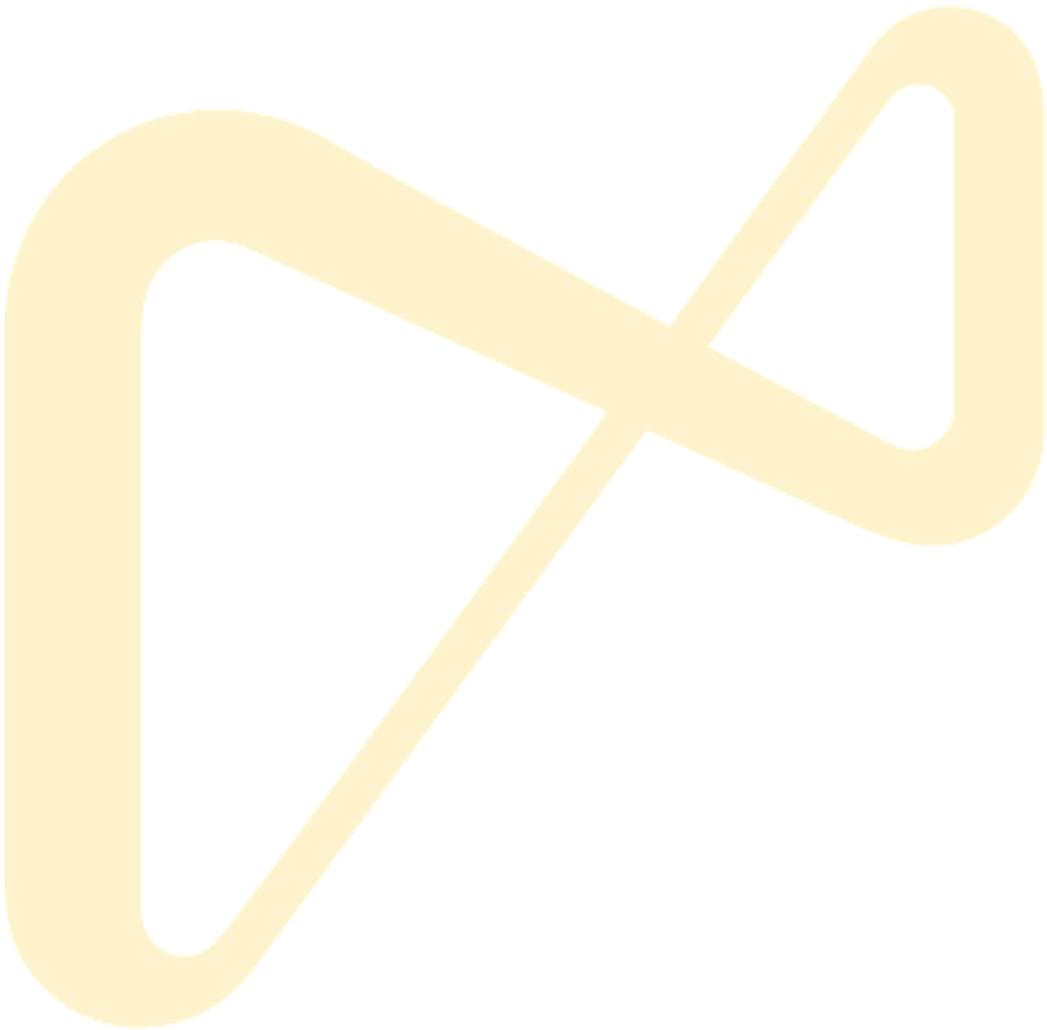
○尚侍の君を朱雀院の後の切にとり籠めたまひしをり——当時の尚侍の君であつた朧おぼろ月夜つきよを、朱雀院の母后である弘徽殿こきでん太后が強引に光源氏に逢えないようになされた時のこと。現在の尚侍の君は、玉鬘。

設問

(一) 傍線部ア・イ・エを現代語訳せよ。

(二) 「いかなりけることならむ」(傍線部ウ)とは、誰が何についてどのように思っているのか、説明せよ。

(三) 「好いたる人」(傍線部オ)とは、ここではどういう人のことか、説明せよ。



次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。

(尾上八)まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のことのみ思ふを、アなからむあとにも、カまへて軽々しからずもてナし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりととも心安かるべきに、誰に見譲るともなく、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もとどめがたし。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしはものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろかなるべき。おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りと思して、念仏高声に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

姫君は、ただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きぬたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。悲しとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、ウやがて迎へ奉るべし。心ぼそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しがるらめ

とあれども、御覽じだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕

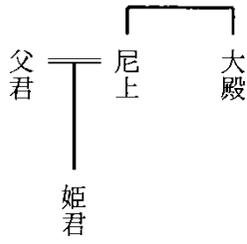
○出で立ち——葬送の準備。

○阿弥陀の峰——現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であった。

○御忌み離れなば——喪が明けたら。

○しかるべき御こと——前世からの因縁。
○中将——姫君のもとにひそかに通っている男性。

〔人物関係図〕



設問

(一) 傍線部イ・ウ・オを現代語訳せよ。

(二) 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部エ)の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

【7】2015 東京大学 2/25 前期日程 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

次の文章は、平安後期の物語『夜の寝覚』の一節である。女君は、不本意にも男君(大納言)と一夜の契りを結んで懐妊したが、男君は女君の素性を誤解したまま、女君の姉(大納言の上)と結婚してしまった。その後、女君は出産し、妹が夫の子を生んだことを知った姉との間に深刻な溝が生じてしまう。いたたまれなくなった女君は、広沢の地(平安京の西で、嵐山にも近い)に隠棲する父入道のもとに身を寄せ、何とか連絡を取ろうとする男君をかたくなに拒絶し、ひっそりと暮らしている。以下を読んで、後の設問に答えよ。

さすがに姨捨山の月は、夜更くるままに澄みまざるを、めづらしく、つくづく見いだしたまひて、ながめいらたまふ。

アありしにもあらずうき世にすむ月の影こそ見しにかはらざりけれ

そのままに手ふれたまはざりける箏の琴ひきよせたまひて、かき鳴らしたまふに、所からあはれまさり、松風もいと吹きあはせたるに、そそのかされて、ものあはれに思さるるままに、聞く人あらじと思せば心やすく、手のかぎり弾きたまひたるに、入道殿の、仏の御前におはしけるに、聞きたまひて、「あはれに、言ふにもあまる御琴の音かな」と、うつくしきに、聞きあまりて、**い行ひさして**わたりたまひたれば、弾きやみたまひぬるを、「なほあそばせ。念仏しはべるに、『極楽の迎へちかきか』と、心ときめきせられて、たづねまうで来つるぞや」とて、少将に和琴たまはせ、琴かき合はせなどしたまひて遊びたまふ程に、はかなく夜もあけぬ。かやうに心なくさめつつ、あかし暮らしたまふ。

つねよりも時雨あかしたるつとめて、大納言殿より、

つらけれど思ひやるかな山里の夜半のしぐれの音はいかにと

雪かき暮らしたる日、思ひいでなきふるさとの空さへ、とちたる心地して、さすがに心ぼそければ、端ちかくみざりいでて、白き御衣どもあまた、うながなかいろい
るならむよりもをかしく、なつかしげに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。ひととせ、かやうなりしに、大納言の上と端ちかくて、雪山つくらせて見しほどなど、
思しいづるに、つねよりも落つる涙を、らうたげに拭ひかくして、

「思ひいではあらしの山になぐさまで雪ふるさとはなほぞこひしき

我をば、かくも思しいでじかし」と、推しはかりごとにさへ止めがたきを、対の君いと心ぐるしく見だてまつりて、「くるしく、いままでながめさせたまふかな。
御前に人々参りたまへ」など、よろづ思ひいれず顔にもてなし、なぐさめたてまつる。

〔注〕

○姨捨山——俗世を離れた広沢の地を、月の名所である長野県の姨捨山にたとえた表現。「我が心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（古今和歌集）
を踏まえる。

○そのままに——久しく、そのままです。

○少将——女君の乳母の娘。

○対の君——女君の母親代わりの女性。

設問

(二) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。

(二) 「なかなかいろいろならむよりもをかしく」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「雪ふるさとはなほぞこひしき」(傍線部エ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

次の文章は、井原西鶴の『世間胸算用』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

分限ぶんげんになりける者は、その生まれつき格別なり。ある人の息子むすこ、九歳より十二の歳の暮れまで、手習てならひにつかはしけるに、その間の筆の軸ねぐを集め、そのほか人の捨てたるをも取りためて、ほどなく十三の春、我が手細てざいこくにして軸簾ちくすだれをこしらへ、一つを一匁もんめ五分ぶんづつの、三つまで売り払ひ、はじめて銀四匁五分むすぶまうけしこと、我が子ながらただものにあらずと、親の身にしては嬉うれしさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊、このことをよしとは誉ほめたまはず。「我われ、この年まで、数百人すひやくにん子供を預かりて、指南しなんいたして見およびしに、その方の一子いちごのごとく、ア氣あのはたらき過ぎたる子供の、末すえに分限ぶんげんに世を暮らしたるためしなし。また、乞食こじきするほどの身代しんだいにもならぬもの、中分ちうぶんより下の渡世とせいをするものなり。かかることには、さまざまの子細あることなり。そなたの子ばかりを、かしこきやうに思おほしめすな。それよりは、イ手てまはしのかしこき子供あり。我が当番の日はいふにおよばず、人の番の日も、箒ほうき取りどり座敷掃はきて、あまたの子供が毎日つかひ捨てたる反古ほうこのまるめたるを、一枚一枚し皺しわのばして、日ごとに屏風屋びやうぶやへ売りて帰るもあり。これは、筆の軸を簾の思おほひつきよりは、当分たうぶんの用に立つことながら、これもよろしからず。またある子は、紙の余慶持ち来たりて、紙つかひ過こして不自由なる子供に、一日一倍ましの利にてこれを貸し、年中に積もりての徳、何ほどといふ限りもなし。これらは皆、それぞれの親のせちがしこき氣を見習ひ、自然と出るおのれおのれが知恵にはあらず。その中にもひとりの子は、父母の朝夕てうせきおほ仰せられしは、『ほかのこともなく、手習を精に入れよ。成人してのその身のためになること』との言葉、ウ反古あにでしにはなりがたしと、明け暮れ読み書きに油断なく、後には兄弟あにでし子どもにすぐれて能書ねがになりぬ。エこの心からは、ゆくす多分限たぶんげんになる所見えたり。その子細は、一筋ひとすぢに家業かせぐ故ゆゑなり。惣そうじて親よりし続きたる家職のほかに、商売を替へてし続きたるはまれなり。手習てならひ子どもも、オおのれが役目の手を書くことはほかになし、若年じやくねんの時よりすすどく、無用の欲心なり。それゆゑ、第一の、手は書かざることのあさまし。その子なれども、さやうの心入れ、よき事とはいひがたし。とかく少年の時、花をむしり、紙鳥いかをのぼし、知恵付時ちゑつきじに身を持ちかためたるこそ、道の常なれ。七十になる者の申せしこと、ゆくす多を見給へ」と言ひ置かれし。

[注]

- 分限——裕福なこと。金持ち。
- 一匁五分——一匁は約三・七五グラム。五分はその半分。ここは銀貨の重さを表している。
- 屏風屋へ売りにて——屏風の下張り用の紙として売る。
- 当分の用に立つ——すぐに役に立つ。
- 紙の余慶——余分の紙。
- 紙鳥——たこ。鋭く抜け目がなく。

設問

- (一) 傍線部ア・ウ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「手まはしのかしこぎ子供」(傍線部イ)とは、どのような子供のことか。
- (三) 手習の師匠が、手習に専念した子供について、「この心からは、ゆくすゑ分限になる所見えたり」(傍線部エ)と評したのはなぜか。



次の文章は、近世に成立した平仮名本『吾妻鏡』の一節である。源平の合戦の後、源頼朝(二位殿)は、異母弟の義経(九郎殿)に謀反の疑いを掛け、討伐の命を出す。義経は、郎党や愛妾の静御前を引き連れて各地を転々としたが、静とは大和国吉野で別れる。その後、静は捕らえられ、鎌倉に送られる。義経の行方も分からないまま、文治二年(一一八六)四月八日、鎌倉・鶴岡八幡宮に参詣した頼朝とその妻・北条政子(御台所)は、歌舞の名手であった静に神前で舞を披露するよう求める。静は再三固辞したが、遂に扇を手にとって舞い始める。以下を読んで、後の設問に答えよ。

静、まつ歌を吟じていはく、

吉野山みねのしら雪踏み分けて入りにし人の跡ぞこひしき

また別に曲を歌うて後、和歌を吟ず。その歌に、

しづやしづしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

かやうに歌ひしかば、社壇も鳴り動くばかりに、ア上下いづれも興をもよほしけるところに、二位殿のたまふは、「今、八幡の宝前にて我が芸をいたすに、もつとも関東の万歳を祝ふべきに、人の聞きをもはばからず、反逆の義経を慕ひ、別の曲を歌ふ事、はなはだもつて奇怪なり」とて、御気色かはらせ給へば、御台所はきこしめし、「あまりに御怒りをうつさせ給ふな。我が身において思ひあたる事あり。君すでに流人とならせ給ひて、伊豆の国におはしましたしころ、われらと御ちぎりあさからずといへども、平家繁昌の折ふしなれば、父北条殿も、さすが時をおそれ給ひて、イひそかにこれを、とどめ給ふ。しかれどもなほ君に心をかよはして、ウくらすき夜すがら降る雨をだにいとはず、かかぐる裳裾も露ばかりの隙より、君のおはします御闈のうちにしのび入り候ひしが、その後君は石橋山の戦場におもむかせ給ふ時、ひとり伊豆の山にのこりあて、エ御命いかがあらんことを思ひくらせば、日になに程か、夜にいく度か、たましひを消し候ひし。そのなげきにくらべ候へば、今の静が心もさぞあるらむと思はれ、いたはしく候ふ。かれもし多年九郎殿に相なれしよしみをわすれ候ふ程ならば、貞女のこころさしにてあるべからず。今の静が歌の体、外には露ばかりの思ひをよせて、内には霧ふかき憤りをふくむ。もつとも御あはれみありて、まげて御賞翫候へ」と、のたまへば、二位殿き

こしめされ、ともに御涙なみだをもよほしたる有様にて、御腹立をやめられる。しばらくして、簾中より卯の花がさねの御衣を静にこそは下されけれ。

〔注〕

- 吉野山——「み吉野の山のしら雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」（古今和歌集を本歌とする）。
- しづやしづ——「いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」（伊勢物語）を本歌とする。「しづ（倭文）」は古代の織物の一種で、ここでは静の名を掛ける。「をだまき（芋環）」は、紡いだ麻糸を中空洞にして玉状に巻いたもの。
- 社壇——神を祭つてある建物。社殿。
- 怒りをうつす——怒りの感情を顔に出す。
- 流人——平治の乱の後、頼朝の父義朝は処刑、頼朝は十四歳で伊豆国に配流された。
- 石橋山——神奈川県小田原市。治承四年（一一八〇）の石橋山の合戦の地。頼朝は平家方に大敗する。
- 伊豆の山——静岡県熱海市の伊豆山神社。流人であった頼朝と政子の逢瀬の場。
- 卯の花がさね——襲かさねの色目の名。表は白で、裏は青。初夏（四月）に着用する。

設問

- (一) 傍線部ア・ウ・エを現代語訳せよ。
- (二) 「ひそかにこれを、とどめ給ふ」（傍線部イ）とあるが、具体的には何をとどめたのか、説明せよ。
- (三) 「御腹立をやめられる」（傍線部オ）とあるが、政子の話のどのような所に心が動かされたのか、説明せよ。



次の文章は、『俊頼髓脳』の一節で、冒頭の「岩橋の」という和歌についての解説である。これを読んで、後の設問に答えよ。

岩橋いははしの夜の契ちぎりも絶えぬべし明くるわびしき葛城かつらぎの神

この歌は、葛城の山、吉野山とのほさまの、はるかなる程をめぐれば、ア事ことのわづらひのあれば、役えんの行者ぎやうじやといへる修行者の、この山の峰よりかの吉野山の峰に橋を渡したらば、事のわづらひなく人は通ひなむとて、その所におはする一言主ひとことぬしと申す神に祈り申しけるやうは、「神の神通じんつうは、仏に劣ることなし。伊凡夫いはんぶのえせぬ事をことするを、神力じしりきとせり。願ねがはくは、この葛城の山のいただきより、かの吉野山のいただきまで、岩をもちて橋を渡し給へ。この願ねがひをかたじけなくも受け給はば、ウたふるにしたがひてほふせ法施ほふせをたてまつらむ」と申しければ、空そらに声ありて、「我わがこの事を受けつ。あひかまへて渡すべし。ただし、エ我がかたち醜みにくくして、見る人おぢ恐おそりをなす。夜な夜な渡さむ」とのたまへり。「願ねがはくは、すみやかに渡し給へ」とて、心経しんぎやうをよみて祈り申ししに、その夜のうちに少し渡して、昼渡さず。役やくの行者ぎやうそれを見ておほきに怒いかりて、「しからは護法ごほふ、この神を縛しばり給へ」と申す。護法ごほふたちまちに、葛かつらをもちて神を縛しばりつ。その神はおほきなる巖いははにて見え給へば、葛かつらのまつはれて、掛け袋かかけぶくろなどに物を入れたるやうに、ひまはさまもなくまつはれて、今におはすなり。

〔注〕

○葛城の山——大阪府と奈良県との境にある金剛山。

○吉野山——奈良県中部の山系。

○役やくの行者ぎやう——奈良時代の山岳呪術者。葛城山に住んで修行し、吉野の金峰山・大峰などを開いた。

○一言主ひとことぬしと申す神——葛城山に住む女神。

○法施ほふせ——仏や神などに対し経を読み法文を唱えること。

○心経——般若心経。

○護法——仏法守護のために使役される鬼神。

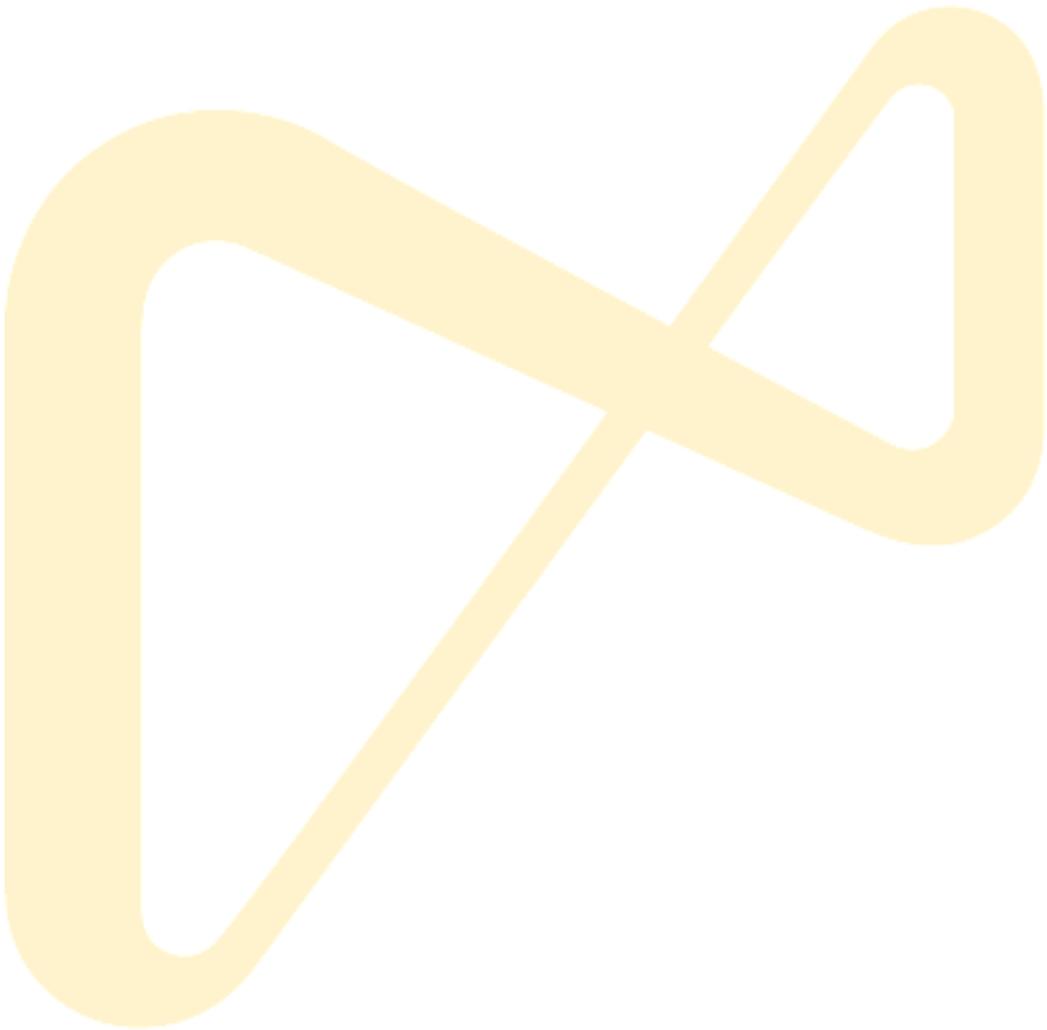
○掛け袋——紐をつけて首に掛ける袋。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「我がかたち醜くして、見る人おぢ恐りをなす」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

(三) 冒頭の和歌は、ある女房が詠んだものだが、この和歌は、通ってきた男性に対して、どういうことを告げようとしているか、わかりやすく説明せよ。



【解答1】2021 東京大学 2/25, 前期 教養(理科1類) 教養(理科2類) 教養(理科3類)

- (一) ア もの寂しいので、女房たちに賀茂祭を見物させよう
イ どれほどの人が横取りするだろうか、いや誰もするまいとお思いになって
ウ 「一緒に見物しよう」と申し上げなされたので
- (二) そちらの主人の道頼は、一条大路も全て自分の物にしなさるつもりか
- (三) 道頼を、その従者にも手出しできない、太政大臣以上の権勢であると評価したもの。

《出典》『落窪物語』

【解答2】2020 東京大学 2/25, 前期 教養(理科1類) 教養(理科2類) 教養(理科3類)

- (一)
 - イ 不思議な巫女がやってきて、壹和を指さして言うことには
 - ウ 人の習性として、恨みは堪えがたいものであるので
 - エ そこにもまた恨めしい人がいたら、もうどこにもいけないだろう
- (二) 維摩の講師になれなかった恨みを、これも運命だと思って鎮めようとした。
- (三) 維摩の講師は、祥延・壹和・喜操・観理の順とすでに神が決めているということ。

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》「春日権現験記」

【解答三】2019 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

- (一) ア 煩わしく思う人もいるだろう
イ 限度がなければならないことである
オ 露見した上はもう仕方がなく
- (二) 妻が、猫が行くはずもない所までも捜しに行ったけれども
- (三) 自分で猫を他所へ預けておきながら、猫が外出した妻の後を追って居なくなつたとだました。

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》「嵐雪が妻、猫を愛する説」關更編『誹諧世説』

【解答四】2018 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

収録なし

《出典》「太平記」

【解答五】2017 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

- (一) ア いいかげんではないことであるけれども
イ どうして申し上げることができるだろうか、いやできない
エ あなたを恋しく思わないでしょうか、いや恋しく思います
- (二) 右近が、光源氏と玉鬘との仲について、実際はどうだったのか不審に思っている。
- (三) 光源氏のように、困難な恋愛をも求める多情な人。

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》『源氏物語』真木柱巻

【解答六】2016 東京大学 2/25, 前期 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

- (一) イ 悲しいというのも月並みな表現だ
ウ すぐにお迎え申し上げるつもりだ
オ 見向きさえなさらないので
- (二) 自分の死後も必ず乳母に姫君を大切にお世話してほしいということ。
- (三) 尼上の火葬をご覧になり、後に残された姫君はさぞ悲しいだろうということ。

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》「あさぎり」

【解答七】2015 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理科一類) 教養(理科二類) 教養(理科三類)

- (一) ア 以前とは違って
オ まことにお気の毒と拝見して
イ 勤行を途中でやめて
- (二) 様々な色の着物を着ているよりも、白一色を重ねているほうがかえって風情がある、ということ。
- (三) 降る雪を見ているうちに、雪によって京の家との結びつきすら断ち切られてしまったように思えてきたから。

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》「夜の寝覚」

【解答八】2014 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理一) 教養(理二) 教養(理三)

- (一) ア 機転が利きすぎる子供が、将来裕福な金持ちになったという例はない
ウ 無駄にはなるまい
オ 自分のするべき役目である、書を書くことはほったらかしにして
- (二) 金銭を稼ぐためにあれこれと工夫する子供のこと
- (三) 家業を忠実に継ぐこうとする子供のほうが、結果的には裕福となるから

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》井原西鶴「世間胸算用」

【解答九】2013 東京大学 2/25, 前期日程 教養(理一) 教養(理二) 教養(理三)

- (一) ア 身分が高いものも低いものも皆
ウ 闇夜に一晚中降り続く雨
エ 頼朝様が無事で生きていらつしやるだろうかということ
- (二) 娘の政子が、平家の敵であり流人の頼朝と恋仲となり、逢いに行こうとするのを、政子の父である北条殿は、ひそかに引き留めた。
- (三) 静が義経を慕う気持ちは、自分が頼朝を思う気持ちと同様であると、言われた所

《この解答は東京大学が公表したものではありません》

《出典》「吾妻鏡」

【解答十】2012 東京大学 2/25, 前期日程 教養

- (一) ア 遠路を巡らねばならないことが煩わしいので、
イ 普通の人間ができないことをするのを神力と呼ぶのです。
ウ 成し遂げたことに応じて

- 
- (二) 葛城の神は容貌が醜いことを恥じており、人が見ると怖がり恐れをなすだろうと思った。
- (三) 昼のうちにその醜い容姿を見られることを怖れたために、夜の間だけわずかに橋を渡した。

《出典》「俊頼髓脳」